
国民たちへの脅迫状

硯間 隼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

国民たちへの脅迫状

【Nコード】

N4437D

【作者名】

硯間 隼人

【あらすじ】

愛宕署捜査一課に勤める刑事・古谷はある日テレビである脅迫状を目にする。最初は誰もがイタズラだと思っていたが、数日間に脅迫状に関する殺人が発生。ただならぬ気配を感じた古谷が脅迫状を送りつけた犯人探しをはじめだす。いったい犯人は誰なのか！よくわからずに進んでいくミステリー。読んでみてください。

第1話 脅迫状

『彼』は朝の情報番組をじっと見ていた。画面上では朝の顔とも言える人物が軽快にトークを弾ませる。

しかし、『彼』はそんなものには興味がなく、見ていたのは画面左上に見える時計だった。朝はいつもこれを見て、家を出る時間を決める。それが『彼』の日課だ。

7時42分 『彼』は右手に持っていた黄色いマグカップをテーブルにおいて、席をたった。

『彼』はアイロンのかったブレザーを着ながら、テレビに映っている時計を確認した。

7時50分 いい時間だ、と『彼』はつぶやき、テレビの電源を消した。

『彼』はテレビを消したあと、パソコンの電源を静かに入れた。パソコンの起動音が部屋に広がっていくのを感じた。

数秒後、パソコンが立ち上がった。ディスプレイには数個のアイコンと草原の画面が広がっていた。

『彼』はマウスをすばやく操作して、画面に出ている何かをクリックした。

「これでよし。」

『彼』はパソコンを急いで消した。

『彼』は通学用のかばんを手にもって、ゆっくりと家を出て行った。

「あー眠い……」

古谷は愛宕署捜査一課係長代理の席で眠りにつこうとしていた。

「おい、おきろ」

増田係長代理の拳が古谷の頭を直撃した。

「いたっ！なんだよ…増田。ちよっとぐらい寝たっていいだろ。ほ

ら俺たち同期なんだし…」

「駄目だ。お前としてはいいかもしれないが、俺はこの席で昨日の強盗殺人事件の報告書を作らねばならない。わかつたらさっさとそこをどけ。」

「へいへい…」

古谷は頭をかきながら席をたった。

そのとき、鬼課長と署内で恐れられている西原課長の声が響いた。
「おい、なんだよ。このニユース…」

古谷と増田が休憩室のソファにかけていた西原のそばに駆け寄った。
「見てみる…これ…」

西原は楊枝をくわえているのを忘れ、口をあけてしゃべった。

古谷と増田はそのニユースを食い入るように見た。

ニユースキャスターがしゃべり始めた。

「繰り返します。この文書は今日、わがテレビ局にメールで送られてきたものの写しです。ご覧ください」

そこにはこう書いてあった。

脅迫状

まずはじめに、この脅迫状はこのテレビ局を脅迫しているわけではない。国民すべてを脅迫している。

宣言しよう。私は二週間後、この日本で一番悪な者を抹殺する。

といっても犯罪者を殺すわけではない。殺す人は二週間後に決める。死ぬのが嫌な奴は、今から言うことを二週間行いつづける。

1、神を崇拜しろ。毎朝7時におきて手を三回鳴らして五秒間拝め。

2、人が喜ぶことを行え。

以下のことをちゃんとしている者は命が助かるだろう。だが国民全員がこれをする、誰も殺せなくなる。そこで、ポイント制にする。
2、は人が喜ぶことをしろといっているがこれをポイント制にする。つまり人が多く喜ぶ事をするほどポイントが高くなるのだ。そこを理解してこの二週間を生きて欲しい。

注意

私は国民全員を見ている。以下のことを怠った場合は次の日死ぬと思っておけ。

それでは国民の皆さん。がんばってくれ。管理人より
と書いてあった。

「ただのイタズラだろう」

増田はくだらん、とつけたし休憩室を後にした。

「イタズラなのかね…」

いつも強気な西原も少し弱気になった声を出した。

「さてと、仕事仕事…」

西原は脇に週刊誌をはさみ、休憩室を出て行った。

休憩室は古谷ひとりになった。古谷はまだそのニュースを見ていた。

「何かが、起きそうだな…」

古谷はそうつぶやき、休憩室を後にした。

「おい、こないだの放火の事件の犯人は家に帰ってきたのか!」

先ほどのショックから一瞬で立ち直った鬼課長の大声が響く。

「まだです」

古谷は自分の席に向かいながらこたえた。

「だったらさっさと張り込み行ってこい!小島が待ってるぞ」

「はい…」

古谷はいすにかけていたコートを手にもち、捜査一課を後にした。

第2話 放火犯

「で、あいつ帰ってきた？」

古谷は路地に止まっていて一台のスカイラインに乗り込んだ。

「いえ、誰も…ふわぁ俺もうねむいつすよ。何しろ徹夜ですから」

車の中にいた後輩刑事の小島はあくびをしながら古谷に話しかけた。後輩の小島はとてもいい奴だ。めんどくさい仕事は変わってくれるし、古谷のつまらない冗談も笑ってくれる。

「もうちょつとで増田が来るから。それまでがんばれ。ほら、コーヒー」

古谷はここに来る途中でコンビニで買ったブラックコーヒーをあくびを連発する後輩刑事に手渡した。

「あつ、ありがとうございます」

小島は手渡したコーヒーのブルトップを開けておいしそうに音をたてて飲み始めた。

「ところで、いつになったら帰ってくるんでしょうかね」

小島はコーヒーを飲みながら、前方に見える少しきれいな五階建てのマンションをあごでさした。

「さぁね。これだけは27歳になった今でもわからないもんだよ」

古谷は手をこすり合わせながら椅子を倒した。

数時間後、古谷の携帯の着信音が車内に響いた。

古谷は、めんどくさそうに携帯の液晶画面を覗いた。そこには西原課長と表示されていた。

「もしもし、古谷です」

古谷は急いで電話に出た。

「あー俺だ。張り込みの方は順調か？」

「順調ですが、進展はありません」

古谷は今の状況を正直に話した。隠してもいずればれることだ。

「そうか…じゃあ、もう張り込みはいい。その被疑者が住んでいる

マンションの住人に聞き込みして今日は引き上げて来い」

「わかりました」

古谷は西原が電話を切るのを確認した後、携帯電話をスーツの右ポケットにしまった。

「おい、おきろ。小島。聞き込みいくぞ」

小島は深い眠りについていた。その寝顔はとてもしラックスした表情で起こすのは気が引けたが、仕方なく小島の肩を叩いた。

「えっ…なんですか…」小島はまだ事態が把握できてないらしい。

「だから、聞き込みいくの」古谷は前方のマンションを指差して、軽く怒鳴った。

「あっそうですか…ちょっと待ってください。したくしますんで…」小島は寝ぼけた顔でゆっくりと起き上がり、掛け布団代わりになっていたスーツのジャケットを着て、緩んでいたネクタイをきっちりと締めた。

「じゃあ、いきましよう」小島は車のドアを開けて外に出て行った。

「ああ、行こう」古谷もそれに続いた。

聞き込みで最初に行ったのは古谷たちが追っている被疑者の隣の部屋に住む『斎藤』という家族だった。

小島がチャイムを鳴らす。中から二十代と思われる女性が出てきた。

「すみません、警察のものですけどちょっとお時間よろしいでしょうか」

古谷は丁寧に話し始めた。

「ええ。別にかまいませんけど…私に何か…」

「はい。実は隣の方のことなんですけど…」

「ああ、菅原さんのことですか？」

女性は何かを思いついたような顔をした。

「はい、そのことなんですけどね。菅原さんこのあたりでの評判はどうでしょうか」

斎藤は少し考えた後言った。

「菅原さんは評判いいですよ。静かだし、ゴミの分別守るし」
「どうやら菅原はこのあたりでは評判は悪くないらしい。」

「その他変わったことはありませんでしたか？」

横から小島が話しに入ってきた。

「そうですね…特に　　あつあれ菅原さんじゃないですか」

斎藤は猫背でグレーの小汚いジャケットを身にまとってとおりを歩いている男を指差した。

「本当ですか」小島は男を凝視しながら言った。

「そうですよ、やっぱりそうだ。あれは菅原さんです」斎藤が興奮したように言った。

「間違いありませんか」古谷は斎藤に確認をとった。

「間違いありません」斎藤は古谷のほうを向かずに行った。

「職質かけよ」古谷は小島の肩を軽く叩いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4437d/>

国民たちへの脅迫状

2010年10月8日23時09分発行